
室外気温は90 !?

一健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

室外気温は90℃！？

【Zコード】

Z5988C

【作者名】

一健一

【あらすじ】

遮光ドームに包まれた東京で暮らす1万人の人々膨張した太陽のせいで外気温は90℃を越えていた。そんな世界で人口削減のために恐ろしい計画が立てられていた。

プロローグ

俺は勇者 轟准也

魔王を倒すため多くの試練を乗り越えてきた。

そう！魔王の城はもうすぐそく

「起業の仕事は大変なのが一般的だよ。」

俺の都會のいし憧れの世界は開始約60文字で一気に崩れ去った

「まだ夜までは8時間はあるが…！」

いい世界を旅しているはずだつた。

卷之三

「・・・おい、聞いてるのか！」

「すいません、聞いてませんでした。」

「いやで抵抗すると厄介なことになりそうだ。」

「まったく、お前は大学に行く気があるのか？」

教卓で竹刀を振り回している先公の愚痴を華麗にスルーして窓の外に目をやつた。

外では、今日の気温と天気がスピーカーから流れていた。

『今日11月26日午後一時の天気予報です。東京全土快晴、気温

は 30 です。』

ああ、今日も暑いな・・・

気づいたときには俺は都合のいい世界にいた。

現実に帰ってきたときに身長が1、2cm高くなっていたのはいつまでもないだろ？・・・

第一話 次の日曜に・・・

学校も終わり帰り道、俺は朝来た道を鬱満開な気分で戻っていた。仕方あるまい、暴力禁止のこの「時世」で、身長が伸びるほど爽快な起こされ方をしてくれやがったからだ。

「やほー、ゆう君元気ないね」

そんな俺の気分なんてミシンコ一匹分も考慮しづに話しかけてきたのは幼馴染のテルだ、
本名は・・・えーと、思い出せない

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「気にするな独り言だよ」

幼馴染と下校できるなんてラッキーじゃないか、鬱な気分も吹き飛ぶぜ、とか言つてるモニターの前の一部の奴らー、
残念だが俺はそうはならない、
なぜなら俺は

ロリコンだからだ!!!!

「ふ~んゆう君はロリコンなんだ」

「つて、おー一心の声を聞くなーー！」

著者ガードが甘いぞ!!!!

こんなことでは裏の話も筒抜けになつて簡単に先読みができてしま

「ではないか！」

「そんなことよつがひといふ間に頼みがあるんだけじ」

「そんなことでかたずけるか、まあいいか、で頼みつてなんだ？」

「うん、あのね、次の日曜日に付き合つてもうりたいんだけど……」

「

「ん、なんだこの展開は第一話にして急展開すがやしませんかいー？」

「つきあつて、なんにだよ」

「えい・・・・・・いかない」

「ん？ 何？ 聞こえなかつたからもつかい言つてくれ」

「・・・・ 映画のチケットがあるから一緒にいかない？」

やたらべたな展開だな、落ち今まで筒抜けで手に取るようわかるぞ

「あ、ああいいけど」

「ホントーへじゅ、じゅあ今度の日曜日に東出入り口前で待つてる
から

テルは小走りで走り去つていった。

一話田にてひともつ落ちまで読める小説か、さすがといつかなんとい
うかこの著者は相変わらずだ。

雄せぬだれに恋つてもなへ心の甘いさないことを語つたのであつた。

第一話 待ち合せ場所にて

色々あって、今日は土曜日
俺の身長が伸びた日が月曜日だったにもかかわらず、あつといつ間に週末だ。

書き手の都合で簡単に世界観が変えられる、やつぱつ小説つていいなあ・・・

おい、作者聞こえてるや
やつぱつこの作者相変わらず適当である

待ち合せ場所は、ドーム東側出入口

まあ、出入り口といつても半永久的に開けられることは無いであろう
死にたがりが無理やりこじ開けようとしたって話は聞いたことがあるが

自殺するんであれば90に焼かれるよりナイフかなんかを使った
ほうが幾分はいいと思うのだがな、

それからじしまらへ待たされた。

いつも通りだな・・・

あいつは相手が誰であろうが遅刻していくのが普通なのであった。

本人いわく、「服とか髪とかのセットで時間がなくなっちゃうの〜

と言つていたが眞偽はどうだか

また待つた。

十数分後

あ、來た來た

「じめーん、お待たせ」

「なんでこんなに遅れたんだ?」

「うん、えっとね、服選んでたら遅くなっちゃった。」

「そうか」

確かに、服は良く似合っていた。

「ね、早く行こ」

「おひ

そう言つて、テルは元気良く走り出した。

確かにあれは言い訳ではなかつたみたいだな
ただ・・・

テルは綺麗な服には似合わないぼさぼさとの髪の毛を揺らしていた。

両立はできていよいよだ

「ゆーくん、早くー」

「おひ

ああ、今日も暑いなあ
雄也は、そんなことを呟きながら師走の空の下、先に見える影を追
い始めた。

第三話 彼女の思いは？

映画館はそこからさほど遠くなく、走って十分くらいの位置にある映画館といつても、昔作られた物を放映したり、少しリメイクをかけたやつを流しているくらいだった。

撮影する場所がないことが、新作を出せない主な原因だと聞いたことがある。

まあ、よくよく考えてみれば直径50kmほどしかないドームの中の街で作れる作品なんて、ほとんど無いだろう、5年ほど前に一度出ていたが、そのときはクレイアニメだった記憶がある。

なんてことを考えながら映画館の扉をくぐった。

テルから渡されたただ券には、軽いタッチで描かれた大きめの船と、その上を飛行するなにやら良く分からぬ、たこのような宇宙人と、券の下のほうに赤い字で映画のタイトルが書かれていた。

映画のタイトルは、

「タイタニックス」

がきの頃に何度か見た記憶があった。

たしかストーリーは、人間は宇宙人に地上を支配されてしまい、船の上で生きることを決意した。

それでもなんとか地上へ帰ろうとして、タイタニックスという偽装空

間の内部から宇宙人の親玉を攻撃しようと試みる、

で、なんだかんだあって救世主の命と引き換えに敵を全滅させるとに成功する、

が、航行中の船が氷山に激突してしまい、船が真つ一つに折れて生存者を残さず沈没。

こんな感じだったかな、

どうやらテルはこの映画を見たことが無いらしく結構楽しみにしていのようだったので、ネタバレをして遊ぶのはやめておいた。

映画が終わって外に出ると、もう時刻は夕刻近くなっていた。

「面白かったねー」

「あ、ああ そうだな」

映画が始まつてすぐ、都合のいい世界に旅立つていたことに気が付かれていないようだ。

それから、俺はテルを家まで送つていいくことになった。

といふか、俺の家への帰り道の途中にテルの家があるというだけなのだが、

テルの家に着く頃には、背景は暗闇に包まれていた。

「ありがとね、送つてくれて」

「いいよ、こつもの」とだる
小学校の頃から行き帰りは一緒だったからこまわりお礼を言われても
も氣恥ずかしいだけだ。

「あ、あのね、、、ゆーくん」

「ん?なんだ」

「うん、えっとね……」「

しばらくの沈黙の末に、吐き出すようにいつ言った。

「私の彼女になりたい」

「・・・え」

唐突だつた。

あまりにも唐突すぎた。

今まで友達としか見ていなかつたテルが・・・

俺を・・・好き！？

「「めん・・・急だよな、急すかるよな、」

「・・・・・」

何も言えなかつた。

頭の中で情報を整理するので手一杯だつた。

「返事は、また今度でいいから、うん、じゃあね」「それだけ言い残すと、テルは家の中に消えていった。

見間違いか、その後姿が、少し・・・悲しげに見えた。

蒸し暑い、歸走の夜のことである・・・。

第四話 満月の光の下で

それから、しばらく家には帰らなかつた。

帰りたくなかつた。

家に帰れば、親が「今田はどうだつたの?」とか、茶化してくることが分かつていてからである今は、一人でいたい、

公園のベンチに寝つころがつて、考えていた。空には、ドームに映し出された満月が、美しい光で街を包み込んでいた。

ジャングルジムの上に人影が薄ぼんやりと浮かび上がつた。
どうやら子供のようである

「ねー、ゆーくんは本物の用つて見たことがある?」
その内の一人がこんなことを言つた。

「そんなのあるはずないよ
ゆーくんと呼ばれたもう一つの影がこたえた。

「そつかー」

「一つの影は、しばらくドームの天井に映された月と星を眺めていた。

ふいに、一つの影が言った。

「本物、見てみたいの？」

「うん、見てみたい、昔の人みたいに外に出て」

「じゃあ、俺が見せてやるよ！ 本物の月！」

「でも、どうやって見るの？ 外には出られないよ」

「簡単さ、俺が大人になつたら外の気温を普通の温度に変えてやる」

「そんなことできるのー？」

「それは・・わかんないけどさ、でも、何とかなる気がするんだ」

「じゃあ、大人になつたら本当の月を見せてね」

「まかせとけーーー！」

いつの間にか寝てしまつたらしい・・・

やたら懐かしい記憶がよみがえった。

そういえば、そんな約束したんだな・・・

雄也は、輝く月に背を向けて、家へと歩みを進めた。

美しく、それゆえに孤高な月は、悲しげな光を放ちながら雲の内側へと吸い込まれていった。

・
それは、本物ではない自分が見上げられるのを躊躇つたかのよう

第五話 終わりの始まり

翌日、雄也は一つの手紙を書いた。

内容は、

午後9時、あの約束の公園で・・・

正直なところ、テルへの返事は昨日を受けたときにもう決まっていた。

いや、それよりずっと前から決まっていた気がする

テルに直接渡そうと思つたが、さすがに気まずくなってしまつので、郵便受けに放り込んでおいた。

学校であつたテルはいつもの調子だった。

昨日のことが、なかつたことのよひ元氣だった。

しかし、時々ボーッとしていたり、何かを必死で振り払おうとしているように雄也の目に映つた。

学校が終わり、家に戻つてからすることもなかつたので遠回りして家に帰ることにした。

無意識的に、テルと出会いたくなかったのだろう、

それから夜まではいつもと変わりなかった。

夜の公園は静かすぎた。

聞こえてくるのは耳をかすめる風の音と、いやに高鳴つている自分の心音

約束の時間まで後三十分と少し

そのとき、公園に来て初めて別の音がなった。

砂利の上を走る車の音

車は雄也の居るベンチの前に来ると土煙を上げながら荒々しく止まつた。

車から降りてきたのは五・六人の警官。

一番年配と思われる人物が雄也に向かつて來た。

そして、いつ言いはなつた。

「轟雄也！あなたを春日光氏殺害の疑いで逮捕するー。」

「な、なんだつてーーー？」

驚いている雄也をよそに、懐から取り出した逮捕札状を雄也に見せ、うむを言わさず雄也を車に詰め込んだ。

「おい！わけわかんねえこと言つてんじゃねえよーーー！」

「黙つていろーーー証拠はそろつているんだーーー！」

そんな馬鹿な、俺は今まで普通の日常を送ってきたはずだ。
俺が知らないうちに違う人格が現れたとかオカルトなこと言つんじ
やないだろうな、

車は走ること20分ほど、

着いたのはこの国の最高機関の一つである、最高裁判所だった。

そこからは、田隠しをされていたので建物の内部がどうなつていた
かは分からない
たぶん、脱走したときのために出口までの道のりを覚えさせないよ
うにするためであつ。

歩くこと10分

約束の時刻だ。

5つ目のドアに入つたところで田隠しをはずされた。

そこは、こじんまりとした部屋で、奥に大きめの机が一つと手前にソファーが置いてあるだけだった。

座れと指示をされ、先客が三人ほどいるソファーに腰掛けた。

机に座つていた貫禄と威圧感を持つ男が厳しい目つきで四人をいちべつすると、

「君ら四人は、死刑だ。言つておぐがこれは何をしようと覆る」と
はない、覚えておきたまえ」

「…」

俺たちの死が決まつた日も月は何事も無いように、光り輝いていた。

これが終わりの宣告ではなく、始まりの宣言であることが分かったのは、もう少し先の話になる。・・・

第六話 死刑囚の顔ぶれと・・・(前書き)

今回は、本文すべての書き直しをやむにいたしました。
これからは、なるべくこのよつなじが無くよつてぬきをつけっこ
たいと思こます。

申し訳あつまへんでした。

第六話 死刑囚の顔ぶれと・・・

俺たちの死刑執行日が決まるまでの間、俺たちは同じ牢屋に閉じ込められた。

牢屋といつても、床から壁から冷たい石だったり、鉄の棒を縦に並べた扉だったり、窓があつても小さいはめごろしの窓だったり、そんなことは無く、普通の部屋より豪勢な感じがするような部屋だった。

俺らが逃げるとかは考えに入れないようだ。

「じゃあ、まあ血[ひ]紹介をしようか」

そう言い出したのは、薄黄色に変色した白衣を身に着けている、20代後半といつたところの男性だった

「僕は、一賢[はじめけんじ]見て分かると思つけど科学者だよ、生物学専門のね」

「さて、次はそこのお姉さんにしてもらおうか」

それを聞いたお姉さんと呼ばれた女性が、面倒くさがり口を開いた。

その女性は、一般人が言つところの美人になるらしい
赤坂都子[あかさかみやこ]だ、特に言つことは無い

「うん、じゃあ次はそこの君」

一賢[ひこ]の口は俺に向かっていた。

俺は名前だけ言つと、次に話すであらう小さな影に田を向けていた。

次の瞬間、俺の心臓には矢が刺さっていた。

そう、天使が放った恋の矢が

そこに居たのは、俺の好きなタイプど真ん中な口りっ子であった。いつの間にか俺と彼女の周りには見たことも無い美しい花が咲き乱れていた。

少女は一瞬俺と田をあわせると、恥ずかしそうに田を伏せた。

「えー、じゃあ最後にお願いできるかな」「

俺を現実に引き戻したのは、賢一の野郎だつた。
ええい、くそ、忌々しい

少女は、若干緊張しながら立ち上がつた。

そのしぐさ一つ一つが俺の心をくすぐる

「古谷さよです。あの・・・えっと、その・・・」

「ああ、うん、ありがとうね」

「は、はい」

これで、全員の自己紹介が終了したわけだが、さすがに話しかけようかと思ったが、さすがに疲れているようなので俺は都合のいい世界に旅立つことにした。

深夜の公園、月光に包まれた一つの影があった。

その影は、徐々に傾いていく月を見上げていた。

雲の隙間から顔を覗かせていた月は、その影を照らすと同時に、より強く光を発していた。

第七話 奇妙な違和感（前書き）

投稿がずいぶん遅れてしましました。
申し訳ありません

第七話 奇妙な違和感

俺が、都合のいい世界から舞い戻ってきたのは、次の日の朝5時30分だった。

「すいぶん早いのは、普段は深夜 時ぐらじままで起きてこるせいだろう。

「・・・一度寝するか」

「おや、轟君、早いね」

「そんな」といい笑顔で言つてきたのは、・・・えーと、やひへー^{はじめ}さんだつたつけ？

「朝は強いほうなのかい？」

「いや、普段はKの負けですよ」

「はつはつはそなうかそなうか

「そんな」とを言いながら、机の上に置かれたトーストをほりほりと、
ん？トースト？

「あれ？」さんそれつて

「ん？トーストだよ・・・・・もしかして轟君は食べたこと無いー。
？」

「いや、ありますよ、ですからそのかわいそな人を見るよな田
はやめてください。」

「せつはつせ、やうだよな、いや、すまんすまん」

トーストを優雅にほうばつながら、新聞を読む、笑顔が似合つ男が一人

これだけ見ると、じつかのボンボンに見えてしまつから不思議である

まあ、そのすべてを薄汚れた白衣が台無しにしてしまつたが

「一わんは、この茶番につこてどう考へてこますか」

「そうだねえ、僕たちが本当に死刑囚だと考へると、この待遇は少し違和感を覚えるよ」

そこからしづらしく静かになつた。

俺が考えていたのは、死刑の方法、警察の本当の目的、茶番に付き合わされた仲間のこと、そしてテルのこと・・・

それから、夕方までは、自分の家に居るような感じがした。
まあ、和みの対象が確立されていたおかげなのだろう、

しかし、そんな時間も長くは続かないのが、世の理と書つものなのであるう

午後5時ごろ、暇になつたので、さよぢやんとトランプでもしようつかと考えていたときには警官が入ってきた。

ちなみに、このトランプもこの部屋の中にあつたものである。

「お前たちの死刑日が決定した。」

そういえば、俺らは死刑囚だつたんだ、忘れていた。

「今日の午後10時だ」

「「今日……?」「

俺と同時に赤坂さんが叫んでいた。

「死刑方法すら聞かされていないといつのに、今日とはさういふん急
じゃないですか」

そう言った一さんに返ってきた言葉は

「死刑方法は、遮光ドームの外に出てもいいが、しかし、そのときこ
一つ仕事をしてもらひ」
扉が荒々しく閉められた。

「妙ですねえ」

一さんはそう言しながら、口元に微笑を浮かべていた。

その日の月は、きれいな満月だった。

しかし、ずいぶん光り方が弱々しくなったように感じた。

薄雲に覆われた月は、消えかけの蠟燭のよひに揺らめきながら、雲
の下へ消えていった。

第八話 本物

さて、この部屋にかけてある大きな柱時計が正しい時間を刻んでいふとしたら現在午後9時をまわつたところである。

死刑執行まであと一時間

さすがに眞もへらへら笑つてはいられなくなつてきたようだ。

赤坂さんはさつきから部屋の中を歩き回つてゐる、落ち着かないのだろう

さよひやんは椅子に座つて心配そうな顔でうつむいてゐる、これら死刑になつてしまふのだ暗くなるのは仕方ない

一さんは、・・・・・ビニから出してきたのか、分厚い本を読みながら紅茶を優雅に楽しんでいた。
しかし、紅茶のパックなんて置いてあつただろうか、

そして俺は、なんだかいつもより落ち着いてゐる、変な感じだ。
これから死刑になると分かつてゐるのに、他人のことを心配する余裕まである

死が怖くないわけではない、むしろ恐れている、

天国や地獄などといふ都合のいい世界があるわけないし、ましてや幽靈になつてこの世界を漂うなんて、そんなのもつとばかげてる
死の後にある世界は永久の暗闇、もつともそのとき感覚なんてものは無くなつてしまつてゐるので怖いとかそんな余分な感情は無いの
だろう

俺は10時になるまで誰とも会話しなかった。

午後10時

扉が開く

「時間だ」

俺たちはまた田隠しをされて外まで連行された。

到着した場所は

ドーム東側出入口

暗闇の中、扉が音も無く開くと、何も無い部屋が一つ顔を出した。

「これを一つずつ持つていけ」

警官が手にしていたものは、一辺が5cmほどの小さな箱だった。

「この先にもう一つ部屋がある、そこでその箱を開ける、説明はすべてその中だ」

その後、扉を開けて、街へと戻つていった。

「つづり、やつぱりダメか

赤坂さんが街側の扉を開けようとしていた。

「さて、これで僕たちが取れる行動は前に進むことだけになつたようですね」

「一せん、なんでちよつとうれしそうな顔してるんですか」

「んー、そう見えます?」

俺たちが深くうなずくと「そんなあ」と言つてわざとじりしく悲しそうな顔をしながら、先へと進んでいった。

先の部屋も前の部屋と大きさや内装に変わりは無かつたが、部屋の温度が確実にあがっているのが分かつた。

警官に渡された箱を開けると、中からは・・・どうにう仕組みなのだろうか、絶対に入らない大きさのはずなのだが・・・耐熱スーツと、小さなメモと、渡された箱と同じ箱が入っていた。

メモには、この部屋で耐熱スーツを着用して外に出ろ、その後、出口すぐ右にある梯子を上り、ドームの上で、中に入つていた箱を開けい、

こう書いてあつた。

「徒づうほかは・・・あつませんねえ
やつぱりうれしかつだ。」

外に出ると、思いのほかそんなには暑いと感じられなかつた。

梯子を上り、頂上に着くまで30分もかかった。
さすがに大きい

頂上からは、月がよく見えた。

「あれが本物か・・・」

その月は、ドームに映し出された月の10分の1ほどの大さだつたが、

手を伸ばせば触ることができるように気がするほど、

とても大きな存在感を持っていた。

雲一つ無い 深い 深い 空の中に 純白のつきが 輝いていた。

第九話 スタートライン

さて、頂上に着いた俺たちにできることは箱を開けること、中からは、頂上付近に点在している、高さ1・8m直径1・5mほどの半円型で半透明な、太陽光パネルと、小さなメモが一つパネルを、露出しているコードに繋げと、書かれたメモだつた。

ドームの頂上には、白い粉が大量にあった。

俺たちは、お互に見ることも気にすることもなくパネルをつけた。

全員つけ終わると、誰の指示でもなくまた頂上に全員が集まつた。

「これで、私たちの最後の仕事が終わつたわけですか、なんだかあつけないですねえ」

「くそ……こんなあつさり終わつてたまるか……！」

「……やん、何か助かる方法は無いですか？」

一さんは肩をすくめて首を振つた。

「そうだ、皆さん、この白いものはなんだかお分かりですか？」
一さんはその場にあつた白い粉を手に取つた。

「砂……？」

「実はですねえ、これ、人骨なんですよ」

「なつ……」「え……」「……。」

「おや？ 雄也君は驚きませんか？」

「うすうす、感じていました。この街の人口増加は近年始まった事ではないと聞いていましたし、僕たちみたいに理不尽な計画に巻き込まれた人たちがいても不思議ではないと」

「雄也君は頭の回転がいいですねえ、そこまで気づいてしまうとは、

「その言い方ですと、一さんは初めから計画の内容を知っていたんですね」

「初めからではありませんでしたけどね」

「この計画は、今から100年前に始まりました。その頃、この街は人が溢れパンク寸前だったと、書かれています。」

「さんは懐から牢屋で読んでいた分厚い本を取り出した。

「人口が増えるにつれて、深刻な電力不足にみまわれたそうです。それらを一度で解決する方法、それがこの計画です。」

「一ヶ月に4人、一年で28人、この街で一年に産まれる子供の数は年間約18人、確実に数を減らすことができるというわけです。」

「さらに、死刑囚にこの太陽光パネルを設置させることで、電力不足もまかなかった。いやはや、非人道的ではありますがなかなかの良策ですねえ、」

「・・・。」

「ああ、やうやう、死刑囚はくじ引きで選ばれていたみたいですよ、国民投票という形でね」

「酷すきやう」

「ですが、それが事実です。現に我々もこいつして同じ道を辿っています」

「・・・本当に・・・・どうしようも・・・ないのか」

「いいえ、一つだけ方法があります。」

「ほ、本当か!?!」

「ですが、これはかなり分の悪い賭けです。いや、当たりなんて無いかもしない、ここで焼け死んだほうがよかつた、と思つかもしれません」

「それでも聞きますか?」

「聞いてやるわ」

「俺は、後ろに居た二人を見た。

「あたしも、聞くほうに賛成だな、人間やうすに後悔するやつやつて後悔しきつて言つしな」

「わ、私も、聞きたい・・・です。」

「満場一致だ。」

「さんは微笑を作り出し
「そうだと思いましたよ」
と、言つた。

「簡潔に申し上げます。ここから脱走します。」

「まずこれを見てください。」

「さんが取り出したのは、あの小さな箱だった。」

「この中には、さらに箱が4つ入っています。一つ皿には食料、二つ皿にはキャンプ用品、三つ皿には水、そして四つ皿には武器が入っています。」

「……ちゃんと全部でそんなものを……。」

「あの豪華な牢獄にすべて入っていましたよ」

「武器まであつたのか……。」

「でもよ、警戒はまだあるんだよ、クーラーの電池はもう一時間とないぞ」

「それは、あれを使いましょう」

「さんの指差す方向には円形の太陽光パネルがあつた。」

「あれを、電池代わりにすれば、雨の降らないここならば半永久的

に作動可能です。」

「あ、あのー、でも、逃げる方向が分からないと、だめなんじゃ……」

・

「それも、心配御無用ですよ。それもこの本に書いてありました。昔ここから真西に行つたところに、氷結洞窟があつたそうです。上手くいけばそこがまだあるかもしません」

「さて、行くかやめるか答へは一つ、今ならまだ引き返せますよ」

「いいまで引き奴はないだる」「そ、そうです。行きましょう」

「あたしの人生は死を待つようなつまらないものじゃないさ」

最後に一さんかじつ言つた。

「そう言つてくれると思つていました。」

闇のなかに輝く月は、だいぶ傾いてきていた。

その、傾きが増せば増すほど、月は東から昇る太陽に、輝きを奪われていった。

そんな中、俺たちは、ようやくスタートを切つたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5988c/>

室外気温は90 !?

2010年10月10日14時31分発行